

# トランプのアメリカに住む

連載……第3回

## ハーバードで教える

世界 SEKAI 2018.3



### 東大が追いつけない理由

**吉見俊哉**  
 上しむ・しんや 一九五二年  
 東京生まれ 東京大学文学部教授  
 現職 東京大学文学部教授  
 メディア研究 都市ドラマ  
 ルギ「空想」の演出文壇「観  
 光と伝来」本学は何か「空想新  
 として近代」(空想文壇)「文  
 学部創立の歴史」(空想文壇)「歴  
 史の足が示す来歴」(空想文壇)  
 ほか著書あり

ハーバード大学フレイザー記念図書館 (© Susan Paige Taylor)

今回、約一年のホスト生活を決めた主目的はハーバード大学で教えることにある。過去一〇年近く、私は東京大学の教育改革に関与してきた。そのなかで嫌というほど東大の可能性と限界、困難を知った。それは、日本の多くの総合大学に共通する困難と限界、可能性でもある。日本の大学は何をどう変え、どこに向かえはいいの。机上の知識なら山とある専門書を読めばいいし、散々になされてきた議論の記録もある。しかし、私はハーバードで自分が教えてみることで、虚心抱懐に東大とハーバードではどこが違うのかを肌感覚で理解したいと考えた。

誤解のないように書き添えておくが、私は「ハーバードの教育」を理想化するつもりはない。今の日本では「ハーバード式」「ハーバード流」云々と書名に銘打った本が少なくとも百数十冊は出されている。これは年々増加傾向にあり、一九八〇、九〇年代にはせいぜい年五冊程度だったが、二〇〇四年以降、ほぼ毎年一〇冊以上が出版され続けている。グローバル化や大学世界ランキングの浸透のなかで、日本の一流大学は米国のトップユニバーシティに及ばないとの見方が広がったことへの証左だろうか。「ハーバード」への関心拡大は、「東大」への幻滅と表裏をなしているのだろうか。

ここにはだいたいに「ハーバード」を特別視することで日本人の劣等感に訴え、より多くの読者を集めていこうとするメ

リアの戦略が見え隠れする。「ハーバード」というブランドの卓越性は、「東大」というブランドを頂点から引きずり下ろし、人々の関心を海外に向けていくのに大いに有効なのだ。二〇〇〇年代以降、就職先の一番人気が国内大企業から外資系企業に移行していったように進学先の一番人気も「東大」「京大」から「ハーバード」「スタンフォード」に移っていくだろう。そのようなグローバル化の言説戦略に、私たちは捕えられているのかもしれない。

しかし「ハーバード」的なものへの日本人の劣等感には、根拠のないブランド戦略の結果とばかりは言い切れない面がある。日本の大学は、アメリカの大学が当り前のように実現できていることを、いまだ実現できていない。それが本音である。ハーバード大学で実際に教えてみることで、日米の大で何がどう異なるのか「東大」と「ハーバード」の間の実質的な距離の中身は何なのかを実感できないか。これが、私にとっての渡米の目的だった。そして実際、私の授業は秋学期を終えたところだが、東大での長年の経験と比して「ものすごく違う」との実感である。その違いの根幹は、大学教育を個々の教師の営為委ねるか、エリート育成の総合的システムとして運営するかの違いにあるのだが、今回は、両者の違いで経験したことを具体的に書いてみたい。

### シラバスは学生との契約書？

私は、昨年秋学期は「日本のメディア研究」(Digital Media)

授業が始まってから、シラバスは決定的な意味を持ち続ける。授業は最初に書いたシラバス通りに進み、大幅な方針変更はNGである。教師だけでなくTA(ティーチング・アシスタント)も学生も、シラバスに従って準備を進め、毎週の授業が進められる。だからある意味で、日本の大学に比べてずっと自由度は小さい。なんて窮屈なんだ、先生がフリートラントで話の流れを作れるほうが創造的ではないかと思われるかもしれない。だが、ハーバードの同僚に聞くと、皆口を揃えて「シラバスは学生との契約書」だと言う。教師はシラバスで授業が提供する内容を詳細に示し、学生はそのシラバスを見

### ハーバードで教え、ハーバードを学ぶ

